

タイトル	大学4年間における日本人英語学習者の口頭による語彙記述技能の習得に関する縦断的実証研究：2年目の中間報告
著者	小林，敏彦
引用	北海学園大学人文論集，5：135-176
発行日	1995-10-31

大学4年間における日本人英語学習者の 口頭による語彙記述技能の習得に関する 縦断的実証研究

— 2年目の中間報告 —

小林 敏彦

本稿では、北海学園大学人文学部1期生の4年間における口頭表現力、特にストラテジーの習得と言語的特性（形態素、統語、語用のレベルを中心に）の発達に関する実証研究の2年目の中間報告を行う。1年目と2年目に収集したデータの質的、量的比較検討を行い、大学入学後1年間で発達した言語的特性を検証したが、データの収集の方法として、被験者に10の語彙項目を制限時間内に口頭記述し、定義する作業が与えられた。質的分析の結果、使用されたコミュニケーション方略の中で「回避」や「話題の放棄」などの消極的方略が全体的に減り、「記述」で説明しようとしたり、自分なりの英語を作り上げようとする「造語」が多く観察され、被験者の言語的創造性の緩やかな発達が確認できた。また顔の表情や態度、ジェスチャーにもゆとりが現われ、発音も明確になり、話すテンポも軽快になった被験者も確認できた。量的分析の結果、正解項目を排除した選定単語数で増加が確認され、口頭発信技能の量的変化が確認された。文法エラーの被験者全体の平均発生頻度は減じた。また日本語の挿入が多くなった一方で、ジェスチャーが大幅に減少し、非言語要素に対する依存から脱却した語彙的、統語的、更に語用的なレベルでの進歩的な発達が観察された。

Keywords：大学英語教育の成果，縦断的実証研究，言語入力と意味交渉

1. はじめに

我が国において、4年制大学での英語教育の成果を量的、質的に実証した研究報告は数少ない。1人の平均的な大学生が入学時から卒業時までの

間に、どのくらいの英語の運用能力を身につけて社会へ飛び立つのか、という素朴な疑問を探究した形跡が見当たらないのは至極残念である。大学の英語教育が大学生の英語習得にどのくらい貢献しているかを検証するには、学生の現在の英語運用能力が受講中の、または受講済みの英語の授業の成果であるかどうか、その因果関係を実証することから始めなければならない。大学英語教育の目的が、教養か実用かの議論を超え、今我々が取り組まなければならないことは、目的の確認よりも結果の検証である。教養を身に付けたとはどういう状態を言うのか、実用的な技能とはどのレベルに達した状態のことなのか、これらの確認とその目標達成可能性を生データを以て検証しない限り、目的論は紙上の空論で終わってしまう。

1-1. 語学授業と外国語習得

教室での語学授業が言語の習得に果たす役割について、米国や英国での第二言語としての英語 (English as a Second Language: ESL) の研究を比較検討してみると、米国、カナダ、英国のような英語圏で第二言語として学校で正規の英語授業を受けている移民者、特に移住者の子の英語の形態素の習得順序、速度、最終的な達成度を、同じ環境の下で学校の英語授業を受けずに日常生活の中で自然に英語を覚えた子供達のものと比較した研究が以前より数多く報告されており、異なった見解が示されている。

例えば、米国で行われた研究の中で、Carroll(1967), Krashen, Seliger, & Hartnett(1974), Krashen & Seliger(1976), Krashen, Jones, Zelinski, & Usprich (1978) らの研究では、正規の英語授業が第二言語習得を促進すると結論づけている。Weslander and Stephany(1983), Krashen(1989) らは、授業による習得の促進は初級者のレベルで特に顕著であると主張している。日本で行われた Chihara & Oller (1978) の研究でも同様の報告がなされている。これらの肯定側に対して Hale & Budar(1970), Fathman (1976) の研究では結論に至らず、Upshur(1968), Mason(1971), Fathman (1975) らの研究では正規の英語授業は第二言語習得を促進しないと結論づ

けている。Larsen-Freeman & Long (1992: 321-322) らはこれらの研究結果を統合して次のような結論を導いている；

- 1) 教室内での教授は、習得の順序 (sequences) には影響を与えないようであるが、習得の速度 (rate) と最終的な達成度 (ultimate level of attainment) については効果があるようだ。
- 2) 教室内で習得可能な社会言語学的能力 (sociolinguistic abilities) と不可能なものについての研究が皆無である。
- 3) 教室内での外国語教授が、簡単な文法の教授などの初級者のレベルにしか有効ではないと結論づける一部の研究者の主張は間違いであり、習得の速度に効果が現われたという報告だけでも教員と学習者にとって重要なことである。

これらの結論から導かれることは、あくまでも教室内での教授は外国語能力の習得を促進するものであり、十分条件ではないということである。EFL の極端な例として、教室外で目標言語 (target language) に接する機会が皆無である場合 (現在の日本の中で英語に関する限り、これは稀なことだが) を除いて、外国語学習には、もっと多くの要素が含まれる。言語習得のために必要な複雑多岐な諸条件の中でも中心的なものであるのは、教室外で接触可能な生の英語の言語入力 (input) と、英語を実際に使用した生活の中でのやりとりである意味交渉 (interaction) があることが定説になっている (Long 1983)。ESL の環境においては、動機づけや積極性などの言語入力と意味交渉に質的にも量的にも影響を及ぼすであろう間接要因が備わっていさえすれば、この二つは物理的にも、心理的にも容易に英語学習の中に取り入れることが可能である。しかし日本のような EFL の環境下では、言語入力と意味交渉の機会を意識的に求め、持続していかなければならない。

1-2. 日本人英語学習者の実証研究の貧弱さ

ここで重要視すべき点は日本を含む外国語としての英語 (EFL) の環境での英語学習者を被験者として行った実証研究が少ない点である。縦断的な研究に至っては皆無に近く、日本の英語教育界での実証研究分野の立ち遅れが強く感じられる。理論は実証によって裏付けられなければならない。

Brown (1988) は、研究を一次的研究 (primary research) と二次的研究 (secondary research) に分類したが、日本の応用言語学界の研究者の中でさえ、二次的研究に終始してしまっており、一次的研究を自らの手で行おうとする研究者は少ない。この片寄りは特に大学での英語教育研究者の間で改善されるべき問題であると思われるし、日本独自の言語学習理論が育たない根本的理由と言える。具体的改善策としては、まず応用言語学研究におけるクラスルームリサーチ (classroom research) の実証研究の手法及び統計処理法が正しく理解され普及されるべきである。また大学レベルの研究者のみならず、英語の基礎作りとして重要な期間にある学習者と日々接触し観察している中学・高校の教員の間にも広く一次的クラスルームリサーチを普及すべきである。日本におけるクラスルームリサーチの立ち遅れは他の研究者 (Kubota 1994:192) も指摘するところである。

一次的リサーチの普及を遅らせている要因として、大学での教員養成課程における履修科目の中に、将来基礎研究を行うために欠かせない教育統計を本格的に扱ったものがほとんどない事実があげられる。試験の平均点などの割り出しはできても、標準偏差、T検定、項目分析 (item analysis) のような全体の教育効果や作成した試験問題の質や量について検討を行い、改善を加えるために必要な知識を学ぶ機会を与えず、他の一般教養課程の科目のような内容と講義手法だけでは、現場の実務に役立つ知識や手法が身に付くとは思われない。現場での独習で十分であるという意見もあるが、日々の生徒指導等で相当の時間とエネルギーを奪われる現在の日本の中学・高校の英語教員の様子からは、期待する方が無理である。これはやはり学習する時間のゆとりとやる気に満ちた学生時代に、それも単位と

して履修しなければならぬ道具的動機づけ（instrumental motivation）が強い時期に集中して覚えるのが望ましく、また記憶として定着しやすいと思われる。そうしなければ、一生その学習の機会を逃してしまうことになり、教育効果の評価において、数量的分析を軽視する傾向を助長してしまうことになる。

1－3．日本の大学生の英語との接触時間

教室外での言語入力と意味交渉は重要であることは述べたが、日本の4年制大学においては、英文科や国際学部のような英語に力を注いでいるところは別として、教室内における言語入力と意味交渉は少ない。ほとんどの大学生は1，2年の教養課程の段階で英語の単位は取得する。北海学園大学のように私立文系の英語必修8単位と定めている機関では、週2時間、90分の授業が、4月から1月ぐらゐまで24週ぐらゐ続き、これが2年間繰り返される。学生が教室内において英語に接する時間は単純に講義開講時間から計算すると、 $90(\text{分}) \times 2(\text{コマ}) \times 24(\text{週}) \times 2(\text{年間}) = 8,640(\text{分})$ で144時間となり、日数換算すると6日間となる。すなわち平均的な大学生の英語の授業時間は、2年間も履修していながら、英語圏でのわずか1週間の滞在期間にも満たないのである。外国人のクラスではこの144時間の多くを生の英語の言語入力と意味交渉に時間に使うことが期待されるが、大半の学生は日本人英語教員の授業を履修するので、実際に彼らがどのぐらゐ生の英語の言語入力と意味交渉を経験するかは想像がつく。日本人英語教員の授業の多くは訳読が中心であるから、音声による英語の言語入力と意味交渉は、一部の教員の授業を除くとほとんど皆無であることは反駁の余地がないであろう。

1－4．学習者側の姿勢

日本の大学生の場合について、何らかの動機づけにより猛烈に英語学習

に励んでいる一部の学生を除いては、一般的な学生にとっては、教室外における英語の言語入力と意味交渉はEFLの環境からは比較にならないほど少ない。一般的に「外国人と会話したい、英語を字幕なしで理解できるようにになりたい」と願う者は多いが、ほとんどは願望の域を出ず、真剣に目標を立て、地道に努力しようという気構えの者は一部の学生に限られている。この傾向はむしろ当然のことであり、現在の日本国内においては英語力がなければ日常の生活に支障をきたすような危惧がほとんどなく、香港、フィリピン、シンガポールに見られるようなESL環境とは全く異なる単一言語社会の中に日本人は定住しているのである。従って一般的な英語学習者は道具的動機づけが著しく欠如している。英語の習得という観点に限定すれば、日本人は望ましい環境に生活しているとは言えない。国際理解とか英米文化への憧憬などという統合的動機づけ (instrumental motivation) に基づき英語を学習している学生はごく少ないのが現状である。必要に迫られない限り、多大の時間と労力を要する英語学習に自ら進んで没頭する気にはなれないのは十分理解できることである。

ここに、ある国立大学学生に対して行われた英語学習に関する意識調査の結果がある。この調査(1995)は、同大学の大学祭で行われた英語の使用と国際性についてのシンポジウムに先立って行われたものである。質問事項の中で「外国語が話せるか。また、話せるようになりたい」という問いに対して、25.6%の学生が「話せる」と答え、69.0%の学生が「話せないが、話せるようになりたい」と回答し、「話せるようになりたくない」という消極的な学生はわずか5.3%であった。この「話せないが、話せるようになりたい」と願う学生のうち、48.7%の学生が話せるようになるための対策として、特に何もしていないと答えた。またこの話せるようになりたいと願う学生の話せない原因自己分析では、「勉強不足、努力不足」、「使う機会がないから」、「学校(語学教育)が悪い」、「耳が慣れていない」、「積極的になれない」、「恥ずかしい」、「自分の語学力に自信が持てないから」、「思い切って話す勇気がない」、「難しいから」、「会話の練習不足」など多様な分析がなされている。この自己分析ではそれぞれの分析項目に対してど

れぐらゐの数の該当者がいたのか量的なデータがないのでどの程度の一般化できるかは疑問だが、「勉強不足、努力不足」、「会話の練習不足」などは的を得ていると思われる一方で、「学校（語学教育）が悪い」という回答も当然のことながらあったことは無視できない。

1-5. 英語教育者側の姿勢

この国立大学の調査では語学授業に対する学生側の評価も行ったが、「とても良い（おもしろい）」という回答もあったが、その多くが「高校の授業の延長のようだ」「英文を訳すだけで英語が話せるようになる訳がない」という教授法に対する不満を上げる回答が多かった。この結果は、同調査に先駆けて3年前にまとめられた大学英語教育学会（JACET）による「職業人から見た英語教育に関する実態と将来像の総合的研究（研究代表者：小池生夫）の中の質問項目の結果でも裏付けられている。同報告では、大学時代における英語授業への積極度に関する質問（29ページ）で、30.7%の回答者が「消極的に授業に臨んだ」と答え、その理由として51.6%の回答者が「授業がつまらなかったから」と答えている。

英語教育者の中には課題でテープを聞かせたりしてビデオを自ら編集して教材として活用し、学生に対する目標言語の言語入力の際会の提供を試みる者も多いが、意味交渉という点では、教室のサイズ、受講生の数、時間の制限などから手が廻らない状態であり、せいぜい「自分でやりなさい。」と言うのが関の山である。

教授法に対する不満は、これらの物理的制限よりも教育者自身にも責任がある。日本の大学の教養課程における英語教育では、英語の発話力や聴解力の習得を明確に打ち出し、教授陣一丸となって協力していく横の連絡体制が乏しく、カリキュラム上のロジスティック（logistic）な調整はあっても、教授法の領域は不干涉事項、不可侵なる聖域であるという認識が教育者間では支配的である。このような同僚に対しても排他的である環境下で、一部の日本の大学で、米国式の学生による教員の授業評価が実験的、

恒久的に導入されつつあることは前進的な変化であり、より開放された教育環境の下に英語教育が改善されていくための好条件として期待できるものである。これに加え、同僚による授業見学も気軽な雰囲気の中で行われることが望ましい。

横の連絡体制は、英語教育のカリキュラムと教育の質の向上のために必要であるが、教授法改善を阻む最大の要因は、言語運用能力の習得を目指し意味交渉を含んだ“Communicative Language Teaching”や“Communicative Approach”などの英語教授法に対して教える側の関心が低いことである。またそうした体制に学生自身も何ら抗議することなく、「単位さえ取得すればよい」という消極的な者が大勢を占めていることもこれに拍車をかけており、言わば“荒廃的共同体意識”がはびこっている状態である。この根本的な背景にあるは、土居健郎氏の唱える日本社会の中の「甘えの構造」(1971)に他ならない。甘えの構造は外国語習得には有害な要素であり、排除しなければならない。

甘えの構造の中で損をするのは真面目な人間である。積極的な学生がいても制度的には彼らの意見を受け入れるシステムがなく、教員に個人的な形で不満を申し立てるより他ない。しかしこのあきらめにより奮起され、独学の精神が促進され教室外の言語入力と意味交渉が量的にも質的にも高まれば、むしろ好ましいかも知れない。しかしこれを逆手に取って英語の実用的口語言語運用能力の習得を大学教育の域外と決めつけ、巷の英会話学校に一任するような態度を通し続ければ、学生と大学の間需要と供給の関係はより一層遊離し、英語の習得を真剣に考えている学生側に多大な経済的な負担を強いるだけでなく、教育者としての愛情に欠けると言わざるを得ない。もちろん教授法そのものの研究に熱心な語学教員は英語の授業担当者の中でも割合として年々増加しつつある傾向にあることも事実である。

1—6．大学英語教育の成果は実証可能か

大学の4年間でどの程度学生の英語力が向上するかを厳密に実証するには、入学時と卒業時に同一のテストかデータ収集のための作業（task）を行い、その結果何らかの変化を観察し記録する必要がある。同一時における集団の平均的な属性の値を調査する横断的研究と異なり、本実証研究のように4年という時間を要する縦断的研究は、研究者の根気と被験者の持続的協力体制が不可欠である。入学時に被験者として参加した学生が4年間、毎年同一時期に被験者として協力してくれる確証はなく、途中中退や留学などで連絡不通となるケースさえある。被験者の確保のためには、研究者は用意周到な準備としっかりした見解を堅持し研究に従事しなければならない。第二言語習得研究の目的は、被験者の言語的特性の縦断的発達を記述、検証し、それから得られた成果を外国語教授法へ応用することである。一次的研究が中心となるため、研究対象は尊厳ある生きた人間であり、物言わぬ文献を探索しているだけでは済まされない。これは、第二言語習得研究の一次的研究の難しさであり、データ収集可能な範囲内にいる学習者の語学レベルそのものが、研究内容に影響を与えることになりかねない。

学生の英語力のレベルとは、読解力、作文力、聴解力、発話力、さまざまな側面があり、分類した議論を進めなければならない。またそれらの技能をどのような手法で記録するかも問題となる。質的研究とするか、量的研究とするかも決定しなければならない。また量的研究とする場合、どのような統計手法を用いて比較するかも課題となる。

1—7．語学力の何を実証するのか

外国語の運用能力はたいてい聴解力と読解力の発信技能（productive skills）並びに作文力と発話力との受信技能（receptive skills）に分類されるが、このうち発話力の測定が最も困難と考えられている。これは測定に

における客観性と信用性について問題があるだけでなく、試験実施の際に大きな物理的制限が伴うからである。高校、大学入試に限らず、中学、高校、大学で行われている定期試験、毎日の小テストに至るまでその主流は読解力を基礎とした書き言葉の能力を測定するものであり、数少ない発話能力を測定するものとしては実用英語検定試験の3級以上のレベルの2次試験で実施されている英語面接試験ぐらいである。発話力の測定は、客観性信用性の問題と物理的制限はあろうが、被験者の数が少なければ十分実施することは十分可能なはずである。しかも縦断的に実証することは意義深いことである。

2. METHOD (実験方法)

本研究では、コミュニケーション方略 (Communication Strategies) の中でもっとも多用される記述 (description, paraphrasing, circumlocution) をデータ収集の手段として、北海学園大学人文学部1期生の4年間における口頭表現力、特にストラテジーの習得と言語的特性(形態素、統語、語用のレベルを中心に)の発達を調査研究するものである。ここで使用する「習得」と「発達」という用語は、本稿では必ずしも進歩な変化や上達という意味に限定されるのではなく、後退的な変化をも含有することを付け加えておきたい。

コミュニケーション方略の実証研究は過去さまざまな手法を用いて行われてきているが、そのほとんどが横断的研究で、縦断的研究は数少ない。本研究は、日本の大学生が入学してから卒業するまでの4年間にどのぐらいの英語力、特に特に口頭の発信技能を習得し社会へ出ていくか、大学英語教育の成果を検証する上で数少ない、しかもコミュニケーション方略をデータ収集の手法として取り込んだ初めての試みである。本稿では、1年目と2年目に収集したデータの質的、量的比較検討を行い、大学入学後1年間に被験者として参加した大学生の言語的特性の発達を検証するもので、この4年間のプロジェクトの2年目までの中間報告にあたる。

2-1. Subjects (被験者)

本実証実験での1年目、2年目連続して同実験に協力参加した被験者は北海学園大学人文学部英米文化学科1部生5名、同2部生4名、日本文化学科1部生1名の合計10名である。その性別の内訳は、男性4名、女性6名であり、初年度のデータ収集時での平均年齢は22.9歳である。彼らは日頃より実験者と面識があり、日頃の様子から英語学習に対する強い意欲が感じられ、自らも何らかの形で日々英語学習に励んでいる学生である。彼らは他学部の学生よりも履修する英語授業がかなり多い（付録1参照）。

2-2. Materials & Procedures (実験材料と手順)

表1にある語彙項目を1)から10)まで順番に実験者が日本語で口頭提示し、その英訳を20秒以内で答えてもらうように被験者に依頼した。これらの項目は、日常生活上一般的に日本人にはなじみ深いものであるが、その英訳が日本の学校の教科書にはあまり出てこないものである。またこれらの語彙項目が全て名詞であるのは、研究開始当初、10項目を記述した結果観察される何らかの言語的特性（関係節の習得など）を見出したい意向があったからである。品詞を統一することにより、一定の言語特性が観察されやすくなると考えたわけである。英訳のわからない項目の時は、20秒間にできるだけ詳細に英語で自由に口頭記述し、定義してもらうようにあ

表1 口頭記述に提示された語彙項目

日本語	英語	日本語	英語
1) かかし	scarecrow	6) コンセント	outlet
2) 盲腸（炎）	appendicitis	7) 通信販売	mail order
3) 水道水	tap water	8) 水族館	aquarium
4) 留守番電話	answering machine	9) 車イス	wheelchair
5) 入れ歯	denture/false teeth	10) フライ返し	turner

あらかじめ指示した。必要に応じてジェスチャーなど自由に交えてもらうように指示した。被験者に対して、実験の目的、使用器材、データ収集形態などについても細部にわたる説明をあらかじめ行った後に実施した。この説明については、被験者間で指示の内容に差が出ないように、あらかじめ書かれた日本文を収録の度に音読する形で伝え、被験者からの手続きに関する質問への回答も必要最小限に抑えられた。

この口頭記述の様子はビデオテープに収め、実験者はこのビデオカメラのやや後方から各項目の口頭提示を行い、被験者の不必要な緊張感と不統一な顔の表情によるフィードバックを排除するために、視線は極力避けるようにして行った。被験者はカメラを直視し口頭記述するように依頼された。

このデータ収集にあたっては、ごく自然の英語の発話行為とは異なる要素を含むものであることは否定できない。実験室的な形態でデータが収集され、目前にビデオカメラが設置されている状態では、被験者に精神的威圧と緊張を強いる心理的な障害が起こりうる。また心理的な要素に加え、データ収集で行われた作業そのものについても制限があった。言語運用を観察することで言語能力を推察するために、本実証研究では、ある言葉を独話で定義することによって得られるデータから被験者の言語的特性、背景知識、世界観などを調査したわけであるが、独話は、現実の言語社会生活においては、その使用領域は限られる。講演、放送など、一般の人から遊離した一部の職業人の言語使用形態である。現実的な場面で、その使用頻度から言えば、対話の方が圧倒的に大きい。小林(1991)はこの点について米国において、アメリカ人の英語の母語話者の前で、日本人留学生2人に別々に‘abacus’‘scarecrow’‘eardrum’‘constipation’‘isosceles triangle’‘appendicitis’を定義してもらい、アメリカ人には意味の確認などの自然な受け答えを交えてもらうように依頼しビデオに収めた。途中で母語話者が相手の伝えようとしている単語が分かった時点で終了する形態を取った。その結果得られた結論は、母語話者が質問するタイミングが2人の被験者との対話で一定でないことが判明した。この状態でより多い被験者に参加

してもらい縦断的にデータを収集していく場合に、一定の制限を加えデータ収集の安定と統一性を確保しなければデータ比較、特に量的比較が極めて困難になることは明らかであった。そのため本実証実験では、このデータ収集の安定と統一性のために、それぞれの単語につき20秒という時間制限を設け、実験者からの一切のフィードバックを排した独話の形態を取り入れたのである。

また1年ごとの言語的、非言語的特性の推移を記録するために、データの収集時点で均一の間隔を開けるために録画日は同一の日を定め、第1回のデータ収集を平成5年10月20日と21日に、第2回のデータ収集を平成6年10月20日と21日に行った。しかし収録場所は、使用施設の規定と制限により隣接しているが異なった大学の施設内で行われた。収録されたビデオテープは、再生を繰り返され被験者の口頭記述は、忠実に書き移され、言語的なものから非言語的特性に至るまで記録された（付録参照）。

2-3. Analyses (分析)

記録に基づき、質的、量的な特性が分析され、2年のデータ間での比較が行われた。質的には、使用された形態素、統語、語用のレベルでの特徴、使用されたコミュニケーション方略の種類、顔の表情やジェスチャー（落ち着き、自信の度合など）などが分析され、量的には、正解数、エラーの発生頻度、全項目で使用された単語数(発話量)、正解した項目を除いた項目に使用された単語数、ポーズの長さ、コミュニケーション方略の使用頻度などが分析された。本来、この数量化された可変値については、初年と2年目のデータ間における同じ被験者10人の平均値と出し、それぞれの平均値の差に統計的有意性があるかどうか、有意水準を定めT検定を行うことにより、一般化を試みるべきであるが、標本数が10では正規分布する可能性が低いため、被験者全体の平均値から数量的普遍性を追及する手法は放棄し、各被験者の縦断的発達の記述分析を中心にした。

また分析の項目の中にコミュニケーション方略を含んだのは、英語力の

るか、また反対に後退するか、また何ら変化がないものであるかを客観的な過去の実証研究データが不足しているので、仮定を設定し、検証する形態をとらず、4年間に得られる縦断的データの中で、進歩的、後退的推移をありのままに観察し分析する立場をとる。大学での英語授業がどの程度まで学習者の第二言語習得を促進するものであるかを知るのはいへん興味深いものであり、大学の英語教育カリキュラムに何らかの示唆を与えることを期待している。しかし、本実証研究参加の被験者は、一般の4年制大学の英語学習者と同様に、4年間通年で英語の授業を受ける機会はなく、卒業時の英語の運用能力と大学の正式な授業での英語学習との間の因果関係は、この時間的な言語入力と言語出力との間の時間的隔たりのため実証は困難であると考えられる。特に、大学英語教育の成果を量的に証明することは、授業時間数以外は数量化することは困難であり、よって厳密な研究仮定の採択か棄却かの二分法的なアプローチは、周辺的なデータの分析に関心が注がれ周辺的な数量分析で一喜一憂する懸念があり、むしろ破棄した。

むしろ、第二言語習得の基本となる言語入力の拠り所を大学教育に限定するのではなく、大学での講義も含めた「英語学習」全体の枠で把握することにより、学習者の独習、海外渡航、日常での英語との接触など、4年間で考えられるあらゆる言語入力と意味交渉の総量をこの縦断的研究の独立可変値 (the independent variable) として設定する。この可変値は被験者各自に依って大きな差異があるものと考えられ、大学の授業の成果と同様に、客観的数量化は困難であり、また仮定の採択、棄却の手法という制限下にはないので、その必要性はないものと判断する。また、依存可変値 (the dependent variable) については、本実証研究の手法に基づいた言語的、非言語的な客観的データ (量的、質的共に) は、独立可変値の中の各構成要素との厳密な対応化と因果関係の証明は不可能ではあるが、「大学4年間での英語学習経験=インプットの機会の総体」と「前進的、後退的言語的、非言語的特性の推移」というむしろ漠然とした2者間の相互関連の観察は十分可能なものであり、本縦断的研究の中心課題に据えたい。

3. RESULTS & DISCUSSION (結果と検討)

3-1. Qualitative Comparisons (質的比較)

被験者全体のデータからわかることは、使用されたコミュニケーション方略については、回避や話題の放棄などの消極的ストラテジーが全体的に減り、記述で説明しようとする場面が多く見られた。また自分なりの英語を作り上げてしまう「造語」なども多く使われる、被験者の言語的創造性の発達を確認できた。更に顔の表情や態度、ジェスチャーにもゆとりが出てきた者もいた。また自信がついたと思われる被験者の多くは、顕著な変化ではないが、発音も明確になり、話すテンポも軽快になった者や英文の構文や語彙にも発達を見せた被験者が何人かいた。

3-2. Quantitative Comparisons (量的比較)

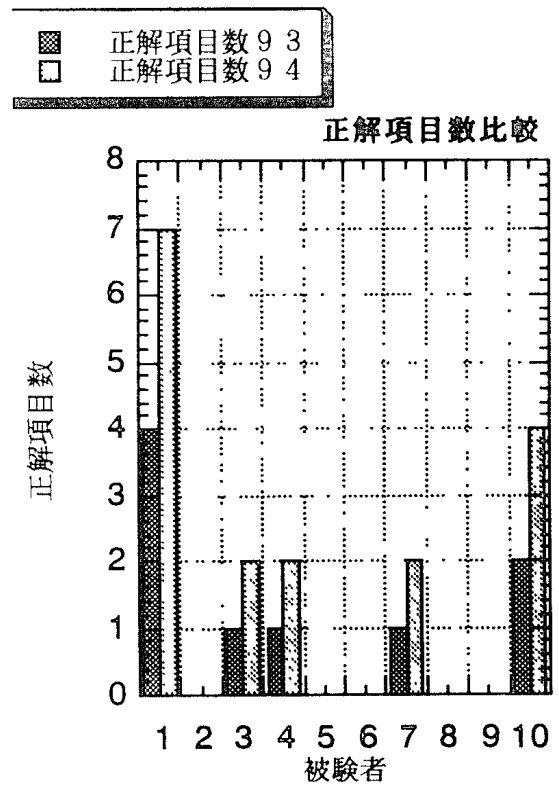
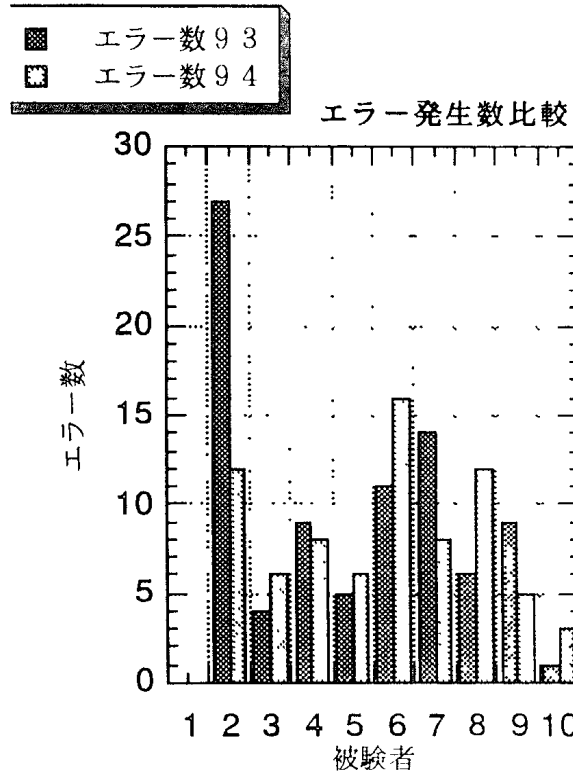
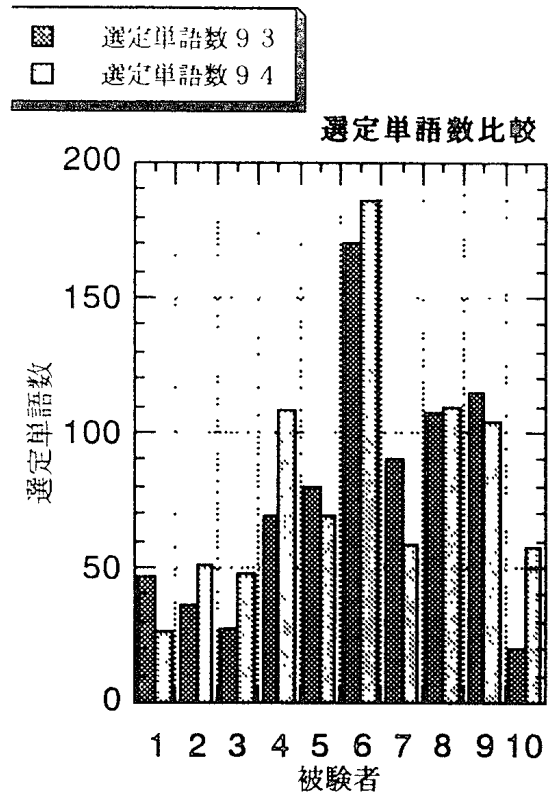
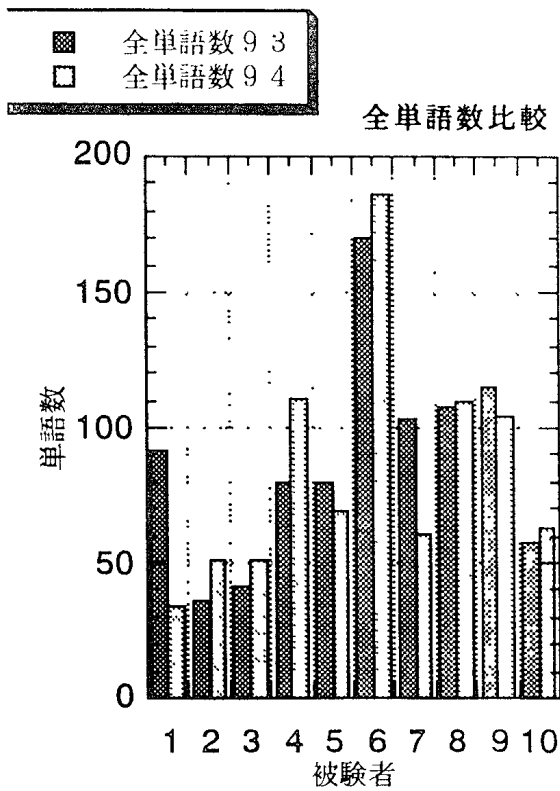
10名の被験者のデータの総括であるので、被験者全体の平均値についても触れるが、これらの平均値間の統計的な有意性の有無の判定は前述の理由から不可能であるので、以下記述的なデータとして提示したい。まずは使用された全語数の被験者全体の2年分の平均値間にデータの間で減少(88.2 → 84.0)が認められたが、これは正解数が全体で増加したことが主因であると考えられるので、正解項目を排除した選定単語数ではむしろ増加(76.3 → 82.1)が確認され、口頭発信技能の量的変化が確認された。この発話量の増加を前進的とみるか後退的とみるか議論の残るところである。文法エラーの発生頻度は、8.6から7.6へ被験者全体の平均発生頻度は減じたが、重要な変化はなかった。更に被験者全体の半数にあたる5名のデータに文法エラー発生数の増加がみられ、そのうち4名の被験者の発話量(使用された単語数)の増加がみられた。これらの被験者の言語的特性として考えられることは、表現力、特に言語的創造性が発達に呼応し発話量が増加し、エラーチャンスが増えた“U-shape behavior”(Kellerman 1983)に類似した例であると考えられる。今後2年間のデータが揃った段階で、この点については明確な結論が得られるであろう。

表3 全被験者の量的特性比較

NO.	学科	性別	年齢	CS数		選定CS数		全単語数		選定単語数		エラー数		正解項目数	
				93	94	93	94	93	94	93	94	93	94	93	94
#1	英2	女	33	6	3	6	3	92	34	47	27	0	0	4	7
#2	英2	男	20	12	15	10	11	36	51	36	51	27	12	0	0
#3	英2	男	18	9	14	7	11	41	51	28	48	4	6	1	2
#4	英2	男	48	9	9	9	9	80	111	69	109	9	8	1	2
#5	英1	女	18	10	10	10	10	80	69	80	69	5	6	0	0
#6	英1	女	18	21	19	20	18	170	186	170	186	11	16	0	0
#7	英1	女	19	12	10	12	10	103	61	90	59	14	8	1	2
#8	英1	女	18	13	18	11	12	108	110	108	110	6	12	0	0
#9	英1	女	19	11	12	11	11	115	104	115	104	9	5	0	0
#10	日1	男	18	11	10	7	8	57	63	20	58	1	3	2	4
平均			22.9	11.4	12.0	10.3	10.3	88.2	84.0	76.3	82.1	8.6	7.6	0.9	1.7

表4 コミュニケーション方略別量的特性比較

NO.	記述		造語		代用		言語切替		話題回避		途中放棄		身振り	
	93	94	93	94	93	94	93	94	93	94	93	94	93	94
#1	6	3	0	0	1	1	0	0	2	1	0	0	0	1
#2	8	8	0	1	0	0	2	3	2	0	0	1	2	1
#3	4	3	1	5	0	0	1	3	0	0	0	2	1	0
#4	9	8	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
#5	10	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
#6	9	8	0	0	0	0	6	8	0	0	1	1	5	0
#7	9	10	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	1
#8	10	10	0	0	0	0	1	2	0	0	2	6	0	0
#9	10	10	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
#10	4	4	0	2	0	0	2	2	1	0	2	2	3	1
平均	7.9	7.4	0.4	0.8	0.1	0.2	1.2	2.1	0.5	0.1	0.5	1.4	1.3	0.4



またコミュニケーション方略の使用種類と頻度では、造語が全体で倍増し、更に日本語の挿入が多くなった一方で、ジェスチャーが大幅に減少した。ジェスチャーの減少は、非言語要素に依存することなく、語彙的、統語的、更に語用的なレベルでの前進的な変化であると判定できる。また話題回避が減少したのに対して、口頭記述そのものを途中放棄してしまう場面が全体でやや増加したが、これは特定の被験者による数量変化であり、例外的なものであった。

3-3. 各被験者の過去2年のデータの量的質的比較分析結果

被験者 # 1

量的比較

この被験者は全被験者の中でも年齢が高く、英語学習歴、海外渡航歴、授業参加意欲、学習姿勢、更に英語の運用能力においても突出した学生である。著しい変化は、発話量が1年間で3分の1になったことである。正解した語彙項目を除いた場合での使用単語数も半減している。これは1年目の時の正解数が4項目であったの対して、2年目はその数が7項目に増えたためである。また驚くべきことに2年のデータを通じて文法エラーが全くなかったことは注目に値する。

質的比較

口頭記述では、一年目の時に既に自信がみなぎっていた。この一年に更に語彙力が高まったと本人は語っており、それは本実証実験で使用された10単語のうちすでに7単語が習得されていることから伺える。入学時で比較的高いレベルに達していた被験者だけに、特記すべき目覚ましい質的变化は観察されなかった。

被験者 # 2

量的比較

この被験者は全被験者の中でも、日頃の授業中の様子や試験の結果から判断すると英語の運用能力がかなり劣る。兩年を通じて10項目中、一つの英訳も言い当てることはできなかったが、全単語数、選定単語共に大幅に増加し、コミュニケーション方略の使用回数は微増した。大きな特徴は、文法エラーの発生が初年度の27カ所から12カ所へ半減したことである。発話量が増えれば、文法エラー発生の可能性も高くなるのが一般的な外国語話者の特徴であるが、この被験者の場合はその点、正確に長く発話できるようになったことがわかる。

質的比較

一年目の口頭記述の時は、かなり緊張しており無言になったり、ニガ笑いなどが多くの場面で観察された。また腹部に手を当てて「盲腸」を表現したり、口に手を当て「入れ歯」を表現するなどジェスチャーが多用されたのもこの被験者の特徴である。2年目の時は、やや緊張感がほぐれた様子であった。コミュニケーション方略については、2年目で「車イス」を口頭記述している時に「障害者」を“broken people”という造語で表現したことは、一年間に言語的創造性が芽生えたことを示すものと考えられる。

被験者 # 3

量的比較

この被験者は全被験者の中でも、日頃の授業中の様子や試験の結果から判断すると動機づけが高く、おおらかな性格の楽道家である。正解数は1年目が1項目、2年目が2項目であった。発話量には大きな変化はないが、選定単語数が大幅に増加したことがこの被験者の大きな特徴と言える。文法エラー数が微増したが、発生箇所自体が少ないので、この1年で発話の

正確さに変化があったとは言い難い。またコミュニケーション方略の使用数も増え、特に、造語の使用頻度が1カ所から5カ所に増えた。2年目のデータ収集時には、「留守番電話」を“the tape recorder telephone”と、「コンセント」を“electricity adapter”と表現した。これらの項目については、被験者は1年目の時は、無言であった。これは言語的な創造力とコミュニケーション意欲の向上を示すものであり、ある事象を自分の世界観をもとに表現しようとする機転を利かせる能力が高まったものとみなすことができる。

質的比較

この被験者のデータの中には、他の被験者のものの中には観察されなかった現象があった。それは「かかし」の口頭記述の時に、2年連続して“guardener”という存在しない単語を使用したことである。これは被験者が学習時に間違っ覚えてきたか、データ収集時の記憶再生の際に何らかの心理的混乱があったためか、単なる調音の仕方が悪かったためであるかは判明不可能であるが、いずれにせよ2年連続使用されたことで、化石化(fossilization)してしまった可能性が高い。また発話中の沈黙の箇所は著しく減り、発話全体が滑らかになった。

被験者 # 4

量的比較

この被験者は全被験者の中でも、最も高齢で既に東京の有名私立大学でスペイン語を学んだ経験がある学生であり、高い学習意欲と向上心を持ち続けている英語学習者である。全体と選定のコミュニケーション方略使用数ともに量的変化は観察されず、文法エラーも微少しただけであるが、発話量は全単語数が80語から111語へ、選定単語数も69語から109語へ大幅に増えたのが特徴である。

質的比較

大きな特徴として観察されたのは、2年目のデータで、10語中7語の口頭記述で、“水道水 means water we use for daily life.”のように「提示された日本語」+「means」+「名詞」+「修飾節／句」の形態を取ったことである。この修飾節・句の部分では、関係節と使用目的を表わす前置詞“for”が、両年の口頭記述で多用され、この被験者の大きな特徴となっている。このような構文がチャンク(chunk)として自動化していることから、全被験者の中で同被験者が際立った英語運用力を持った学習者であることが伺える。

被験者 # 5

量的比較

この被験者は高等学校の英文科を出て、英米文化学科に進学してきた経緯を持ち、英語の母語話者と英語で話した経験が比較的多い学生である。2年間のデータから観察されたこの被験者の口頭記述の最大の特徴は、同一単語の反復が多いことである。1年目のデータで5カ所、2年目で7カ所確認された。この理由として考えられるのは、同被験者が英語母語話者との英会話体験から、英文を頭の中で構築し調音する間のギャップを沈黙ポーズ(unfilled pause)で満たすのではなく、言葉で充当されたポーズ(filled pause)で満たした方が、自分の発言権(turn-taking)を継続されるためにより適切であることを経験的に体得していたためと考えられる。この充当ポーズを同被験者は同一単語の反復で行ったわけである。しかし実際には、1年目のデータでは沈黙ポーズもかなり確認されている。2年目でそれが大幅に減少し、充当ポーズが5カ所から7カ所と増加したことで大学入学後にポーズの取り方に関して緩やかな習得があったのではないかと推測できる。1, 2年ともに英訳を言いあてた項目はなかった。文法エラーの発生は微減した。

質的比較

語彙的習得として一つ観察できた箇所は、「盲腸」の口頭記述で、1年目で “It is sick” と言ったのが、2年目で “It is one of, one of the sickness.” と正しい品詞を用いたことである。この文法エラー修正が習得によるものか、または1年目での文法エラーは記憶のもつれ (a lapse of memory) なのか調音エラーなのかは、本研究では回想インタビュー (retrospective interview)^{#1} を実施していないので憶測の域を出ない。コミュニケーション方略は全て記述であり、その使用頻度についても2年間に変化は見られなかった。

被験者 # 6

量的比較

この被験者の口頭記述の最大の特徴は、発話量、日本語の挿入 (language switch) 頻度、ジェスチャーの頻度が多いことである。この三つの量的数値は横断的比較においても他の被験者と比較にならないほど多い。しかし同被験者の縦断的比較では、発話量は、170語から186語の増加であるが、統計的有意差は判定不可能である。コミュニケーション方略の使用頻度は横断比較に於いては多いが、縦断比較では微増しただけである。文法エラー数については約50%の大幅増加が見られた。

質的比較

日本語の挿入が多用されたが、「田んぼ」「水道水」などの実験者から口頭提示された項目を記述文中に挿入したものと、「あっ」、「うんと」、「だから」等の充当ポーズとして用いられたものがあった。注意すべき点は、「う

^{#1} 回想インタビューを英語教授法に応用した研究として、小林敏彦「Can Retrospective Feedback Improve ESL Speech?」(北海学園大学人文学会人文論集第4号1995年4月)がある。

んと」の挿入が1年目のデータでは全く観察されなかったのに対して、2年目では8カ所もあることである。この日本語の使用された箇所をよく見ると、文と文の間よりも1文中に多く見られることから、単語を思い浮かべる間の充当ポーズとして使用したことがわかる。またジェスチャーの使用は1年目のデータに限られ、2年目では全く使用されなかった。ジェスチャーが使用された項目は、提示項目の中でも「かかし」、「水道水」、「入れ歯」、「コンセント」などの視覚的に表現しやすい項目に限られた。1年目で多用されたジェスチャーが、2年目では使用されなくなり、代わって日本語の充当ポーズが多用されるようになったのはどういう理由によるものか興味深い点である。一般的に、ジェスチャーなどの非言語コミュニケーション手段は、言語的機能を補足、またはそれに代わるものとして考えられる。このことから本被験者のジェスチャーが減じ、非言語要素への依存脱却が計られたのは言語習得のためか、それとも被験者の言語表現スタイルの変化によるものであるかは判断が困難である。

被験者 # 7

量的比較

発話量の大幅な減少がこの被験者の口頭記述の最大の特徴である。それに伴い文法エラーの発生も減った。正解項目数は、初年度1項目、2年目が2項目と微増しただけだが、全単語数のみならず、選定単語数も大幅に減ったことから1項目あたりの発話量が減ったことになる。

質的比較

各項目に於ける表現形態の特徴として、初年度は文や節を用いた記述が多かったのに対して、2年目は句で表現しているものが見られる点である。例えば、「留守番電話」は、初年度は“If telephone come to home, if nobody here, we record message/in the telephone.”は、2年目では“telephone with taperecorder”と簡潔な句構造で表現している。同様に「水

道水」は “We can drink from……” は “water in the kitchen” となった。このような句の使用がこの被験者の発話量の大幅な減少の主因であると思われる。また両方の年ともに、「うんと」という挿入語やジェスチャーも多用されている特徴がある。

被験者 # 8

量的比較

発話量は、微増だが、文法エラーが6カ所から12カ所へ倍増した。正解数は2年ともなかった。「わかんない」「わかりません」を発しメッセージの放棄した箇所が、初年度の2カ所から2年目は6カ所に増加した。これらの量的データだけみると望ましい言語習得が進んだとは判定し難い。

質的比較

冠詞の使い方がよくなるようになった。例えば、「かかし」の口頭記述では、1年目が “It has long legs, we have one leg. It is in rice field.” と “field” の前の冠詞が落ちているが2年目では、“It has one foot, and sometimes it has a hat and in the rice field.” と冠詞が正しく使われている。また1年目では関係代名詞を使用した箇所はなかったのが、2年目では使用されたところが2カ所あった。しかしそのいずれの箇所でも正しい関係詞の使い方がされていない。例えば、「入れ歯」は “Usually old people use it who nothing, who had many who had no many teeth.” と表現され、動詞の欠落 (nothing の前の have)、時制の誤り (had は have にすべき)、余分語の挿入 (no 後の many) など混乱した使い方がされている。また、「車椅子」では、“It is used by the people who we are broken legs, and can't walk.” と関係代名詞の後に “have” を使用すべきところに、不要な “we are” が使用されている。また記述中一般的な主語として三人称の “you” をほとんどの項目で使用しているのも本被験者の特徴であり、他の被験者の多くは二人称の “we” を使用していた。

被験者 # 9

量的比較

コミュニケーション方略の使用頻度，使用単語数ともに大きな変化はなかった。エラーは9カ所から5カ所へ大幅に減ったが，10項目の合計比較であるので有意差の確認は困難である。また1年目は「うんと」を12回も使っていたのが，2年目ではまったくなくなり，代わりに「うん」が3回使われた。

質的比較

他の被験者と比べて声が小さく，発音不明瞭な点が多く，終始下を向いて話すのが本被験者の特徴である。また単語の反復が多くあり，充当ポーズとして使用されていると思われる。また比較的エラーが多かったが，その多くは冠詞，関係節，語彙選択であった。

被験者 # 10

量的比較

正解した語彙項目を除いた場合での使用された単語数をみる限り発話量が3倍になり，消極的なストラテジーも半減した一方で文法エラーが増加した。しかしこの文法エラーの微増なので，むしろこの発話量の大幅な増加に着目すべきである。

質的比較

第10語彙項目のデータにある“partner with フライパン”に象徴されるように工夫し意味を伝えようとする前向きな変化が確認された箇所が随所にみられる。またデータ収集の間，かなり落ち着いた様子と自分の英語力に自信を持っている様子が伺える。この被験者は2年目のデータ収集の2カ月前に，北海学園大学の姉妹校であるカナダのレスブリッジ大学への夏

期研究に参加し、1カ月の英語集中講義を受けてきた経緯がある。こうした体験が、帰国後の英語学習者の動機づけに大きな影響を与えることは経験的にどの英語教育者も同意することであるが、彼もその収穫を得てきた者の一人であろう。

4. CONCLUSIONS (結論)

本実証研究は4年がかりの縦断的研究として進行中のもので、本論文ではその中間点にあたる2年分のデータをもとに第二言語習得の質的、量的な記述を試みたものである。初年度と2年目の量的データ比較においては、その被験者全体の統計的有意差はサンプル数から判定できなかった一方で、質的な要素において言語的及び非言語的な観察可能なデータの詳細な分析では、発展的な変化が認められた被験者がいたことは特記すべきであろう。

観察された質的变化が広義において第二言語習得が顕在化したものと仮定した場合、それが、大学の英語授業、本研究の場合は北海学園大学人文学部で実践されている外国人講師によるCLT(Communicative Language Teaching)を中心とした語学授業の成果なのか、またはその他の被験者の独習的要素の方がむしろ主因と考えられるかどうかという因果関係の厳密な解明は本研究の枠を超えるものである。本研究のように、被験者に一定の作業が課され得られたデータに研究対象を限定した場合でも、それがいかなる言語入力と因果関係があるか解明することも困難であり、漠然と「語学力」と「授業」というそれぞれ複雑で多様性に富む2つの実体の因果関係に至っては相当の実証研究デザインが要求されることは自明である。現在のところこれらの実体、広義において言語入力と言語出力の関係解明は、Kraschen (1981, 1985) が入力仮説 (input hypothesis) の中で、説明それ自体をもブラックボックス化し濁している事実から明らかなように難解な課題である。しかしながらその難解さのために大学英語教育の成果を、直観的な記述や意見の表明に甘んじ続けるは許されるべきではない。実証

的な研究をあらゆる要素, それも, 試行錯誤を繰り返しリサーチデザインを改良しつつ, 「点」である各SLA研究者のケーススタディーが集結し「線」となり, 少しでも光明となる成果を期待すべきである。しかし残念ながら, 「線」になるほど日本国内では縦断的なケーススタディーは外国語学習の分野では行われてはいないのが現状である。もしそれが進展すれば, 教授法への示唆として, 教材, カリキュラム等の整備, 向上に寄与し学生へのフィードバックが可能となるであろう。

これからの2年間のデータが出揃った後に, より詳細な分析と各被験者の過去の英語学習態度, 学習方略, 言語入力等の独立可変値に関する情報収集を進め, 多様な角度から大学の語学教育と学生の英語力という大きなテーマを探って行きたいと考えている。特に卒業時との入学時との比較は研究者のみならず被験者本人にとってもたいへん興味深いはずである。本実証研究が大学英語教育の成果と第二言語習得との関わりに何らかの示唆を与えてくることを期待しながら, 本研究を続行する所存である。

References

- Brown, J.D. (1988). *Understanding Research in Second Language Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carroll, J. (1967). Foreign language proficiency levels attained by language majors near graduation from college. *Foreign Language Annals* 1: 131-51.
- Chihara, T. & Oller, J. (1978). Attitude and attained proficiency in EFL: a sociolinguistic study of adult Japanese speakers. *Language Learning* 28: 55-68.
- 土居健郎(1971)「甘えの構造」弘文堂
- Faerch, C and G. Kasper. (1983). Plans and strategies in foreign language communication. In Faerch and Kasper (eds.), *Strategies in Interlanguage Communication*, pp.21-60. London: Longman.
- Fathman, A. (1975). Language background, age and the order of acquisition of English structures. In Burt, M. and Dulay, H. (eds/) *On TESOL '75*. TESOL, Washington, D.C

- Fathman, A. (1976). Variables affecting the successful learning English as a second language. *TESOL Quarterly* 10(4): 433-41.
- Hale, T. & Budar, E. (1970). Are TESOL classes the only answer? *Modern Language Journal* 54: 487-92.
- Kellerman, E. (1983). If at first you do succeed……. In Gass, S. and Madden, C. (eds.). *Input in second language acquisition*. Newbury House, Rowley, Mass.
- Kobayashi, T. (1993). A Study of Communication Strategies: Comprehensibility of Japanese English. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*. No.1 November 1993, 105-130.
- Kobayashi, T. (1994). Learner Variations in Communication Strategies: A Study of Japanese, Chinese and American Paraphrasing Techniques in English and Their Application to Task-based Grammar Instruction. *Studies in Culture*. No.3 October 1994, pp.109-38.
- Koike, I. (1990). *A General Survey of English Language Teaching: College Graduates' Views*. Tokyo: JACET.
- Krashen, S, Seliger, H & Hartnett, D(1974). Two studies in second language learning. *Kritikon Litterarum* 3: 220-8.
- Krashen, S, Seliger, H(1976). The role of formal and informal linguistic environments in adult second language learning. *International Journal of Psycholinguistics* 3: 15-21.
- Krashen, S, Jones, C, Zelinski, S & Usprich, C. (1978). How important is instruction? *English Language Teaching Journal* 32(4): 257-61.
- Krashen, S. (1981). *Second Language Acquisition and second language learning*. Oxford: Pergamon
- Krashen, S. (1985). *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. Longman: London.
- Kubota, M. (1994). Classroom Research and Second Language Acquisition. In Koike, I. (ed.). *Second Language Acquisition*. Taishukan Shoten, Tokyo, 179-198.
- Larsen-Freeman, D. & Long, M.H. (1992). *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. London: Longman.
- Long, M.H. (1981). Native speaker/non-native speaker conversation in the second language classroom. In Clarke, M. and Handscombe, J(eds.),

207-225.

Mason, C. (1971). The relevance of intensive training in English as a foreign language for university students. *Language Learning* 21: 197-204.

Upshur, J. (1968). Four experiments on the relation between foreign language teaching and learning. *Language Learning* 18. 111-24.

Weslander, D and G. Steephany. (1983). "Evaluation of English as a second language program for Southeast Asian students'. *TESOL Quarterly* 1983: 473-80.

付録1：北海学園大学人文学部英語教育年次計画表

	英米文化学科1部	英米文化学科2部	日本文化学科1部
1年次	基礎英語演習Ⅰ（語彙演習） 基礎英語演習Ⅱ（聴解と発音） 基礎英語演習Ⅲ（読解力） 英語Ⅰ(A)（英作文） 英語Ⅰ(B)（英作文）	英語基礎演習Ⅰ 英語Ⅰ(A)（講読） 英語Ⅰ(B)（講読）	英語基礎演習Ⅰ 英語基礎演習Ⅱ 英語Ⅰ(A)（英作文） 英語Ⅰ(B)（英作文）
2年次	基礎英語演習Ⅳ（イディオム） 基礎英語演習Ⅴ（ビデオ聴解） 基礎英語演習Ⅵ（読解） 英語聴解演習 英語読解演習 英語表現法Ⅰ（スピーチ） 英語表現法Ⅱ（英作文） 英語表現法Ⅲ（プレゼンテーション） 英語Ⅱ(A)（英作文） 英語Ⅱ(B)（英作文）	英語基礎演習Ⅱ 英語基礎演習Ⅲ 英語聴解演習Ⅰ 英語読解演習Ⅰ 英語Ⅱ(A)（講読） 英語Ⅱ(B)（講読）	英語聴解演習 英語読解演習 英語Ⅱ(A)（英作文） 英語Ⅱ(B)（英作文）
3年次	コミュニケーションⅠ	英語表現法Ⅰ 英語表現法Ⅱ 英語聴解演習Ⅱ 英語読解演習Ⅱ	英語表現法Ⅰ 英語講読Ⅰ
4年次	コミュニケーションⅡ 英語応用技術Ⅰ 英語応用技術Ⅱ 英語応用技術Ⅲ 英語応用技術Ⅳ	英語表現法Ⅲ 英語表現法Ⅳ	英語表現法Ⅱ 英語講読Ⅱ

付録2 : transcription

被験者 # 1

1) かかし

93年 It is in, put in the rice field in order to prevent crows or sparrows. ///// It's called a scarecrow?

94年 scarecrow *正解

2) 盲腸

93年 It's a kind, it's a kind of organ, uh, near the stomach Uh, one is acute. The other /// is disease.

94年 (腕組んで目を閉じる) Uh, /// it's a kind of disease So, uh, / one is chronic, the other is

3) 水道水

93年 water, uh, we can drink

94年 water, it's a, uh, / you have to pay for //// city water department every month

4) 留守番電話

93年 Uh, answering machine *正解

94年 answering machine *正解

5) 入れ歯

93年 It's an artificial, artificial tee, teeth. It's for / senile people /// If they want to eat, they, they have to use in, in order to eat.

94年 artificial teeth

6) コンセント

93年 If you have to use electric appliance, you have to, uh, use in order to // get electricity

94年 outlet *正解

7) 通信販売

93年 mail order *正解

94年 mail order shopping *正解

8) 水族館

93年 aquarium *正解

94年 aquarium *正解

9) 車イス

93年 wheelchair *正解

94年 wheelchair *正解

10) フライ返し

93年 It's a cooking, cooking, uh, utencil, utencil

94年 turner *正解

被験者 # 2

1) かかし

93年 It is, it is made of wood. (ニガ笑い)

94年 // // // Here is a farm. It's standing on the ground. It's means / that

2) 盲腸

93年 盲腸? It is pain. (腹部に手をあてる動作)

94年 // // // Here is on my body.

3) 水道水

93年 It has no taste.

94年 // I used water

4) 留守番電話

93年 I have not it. // It is useful.

94年 This, this thing is used // I (考える)

5) 入れ歯

93年 入れ歯 (口に手を当てる動作)

94年 This is used / person is // person have not // 歯

6) コンセント

93年 It was used

94年 This is used, uh, by electronic // systems.

7) 通信販売

93年 _____

94年 (考え込む) ダメです

8) 水族館

93年 I, I went to // swim, I often watch it.

94年 There is a うん // fish // uh

9) 車イス

93年 It is // //

94年 This used // by broken people.

10) フライ返し

93年 (ニガ笑い)

94年 I don't know. (首を横に振る) // // // わかりません

被験者 # 3

1) かかし

93年 // // // (しばらく考え, 思いついて手を叩く) Japanese rice guardner

94年 Japanese / rice farm's gardener. This / it is a / doll of grass. わかんない
ダメだ 次どうぞ

2) 盲腸

93年 appendicitis * 正解

94年 appendicitis * 正解

3) 水道水

93年 Not, uh, bottle water, uh // // // //

94年 Uh, water not of bottled water

4) 留守番電話

93年 // // // uh, telephone // // // //

94年 Uh, the tape recorder telephone The telephone, it have taperecorder

5) 入れ歯

93年 //入れ歯// old people use and, uh,

94年 Uh, the tooth of, uh, for old person or, uh, 入れ歯?

6) コンセント

93年 コンセント

94年 electricity's adapter? adapter

7) 通信販売

93年 // // // It is used for a letter or telephone

94年 通信販売か (上を見る) uh // // // letter or telephone's selling

8) 水族館

93年 Uh // there are many fish and // uh, *dolphin* or and there are entertaining children.

94年 aquarium *正解

9) 車イス

93年 It's a chair for handicapped // people, chair

94年 Uh, stretcher, uh, no, no, no. //ストレッチャーじゃない

10) フライ返し

93年 (動作)

94年 フライ返し? Uh, uh, cooking, cooking // patter

被験者# 4

1) かかし

93年 statue for, uh, winding birds in a rice field

94年 かかし We use かかし for rice field // // // to get off crow, uh, because they eat rice

2) 盲腸

93年 appendix *正解

94年 盲腸 means appendix. *正解

3) 水道水

93年 water // // produced in the // // // source of jags, from bottle of jags

94年 水道水 means water we use for daily life

4) 留守番電話

93年 telephone that we use // // // *absent times*

94年 留守番電話 means (咳ばらい) response to telephone system when ええっ user

didn't, does not stay at home, at home.

5) 入れ歯

93年 // tooth / which is made for adult old person

94年 入れ歯 means artificial tooth // for old men and women.

6) コンセント

93年 It's electric appliance when when we use electric equipment, uh, electric source

94年 コンセント is Japanese. We get electric from it. They are on the wall usually

7) 通信販売

93年 That is we can buy by mail

94年 通信販売 means / post うん vending, vending articles by post, uh, うん let by postal letter, postal letter

8) 水族館

93年 building // building for / in order to see fish and marine

94年 水族館 means うん aquarium, aquarium *正解

9) 車イス

93年 It's wheel for for handicapped person.

94年 車イス wheel for, uh, /// for /// legless man or legless or damaged man.

10) フライ返し

93年 フライ返し When we use, make food テンブラ, we use it to / in the

94年 In cooking? (意味の確認をする) あっ フライ返し means, we use フライ返し in, uh, cooking we use we also use there turn egg cook it we made sunnyside-up, sunnyside-up eggs

被験者 # 5

1) かかし

93年 It is standing, standing in the /// field. People make rice.

94年 It is standing in, in the ____ garden and it / it guard, a guard

2) 盲腸

93年 It is sick /// feel //// (腹に手を当てる動作)

94年 It is one of one of the sickness

3) 水道水

93年 It is water // which we we drink. It is beautiful water.

94年 The water / which / which is cleaned / by / by

4) 留守番電話

93年 We use it /// when we / out our house

94年 The telephone which have, which has // tape / and the tape can recording

5) 入れ歯

93年 When we have bad bad teeth teeth, we attend it // make it.

94年 //// Teeth / which is

6) コンセント

93年 It /// when /// electric

94年 It is // it can // make

7) 通信販売

93年 We can buy / anything / through it.

94年 We can buy something through it.

8) 水族館

93年 There are many many fishes in there

94年 We can see many / fishes /// in there.

9) 車イス

93年 It is a car. Handicapped people use it.

94年 // People who has handicapped / with / their foot

10) フライ返し

93年 When we //// cook, we use it // usually when we use it

94年 // We use it // when we cook

被験者 # 6

1) かかし

93年 It is no man. It is there is in “田んぼ” It's open the, it prevent birds. (両手を広げる動作)

94年 It it it is on the field. On the field there are crops うんと but many birds, うんと many birds eat crops, crop to eat だから かかし prevent from the birds

2) 盲腸

93年 It is sick // which is. It is very //// cold. It's it's *need* to ///

94年 It is it //// if we have we have we take “盲腸”?

3) 水道水

93年 We need *to* life life every day. When we use (蛇口を表わす動作) The shape is // this / We need hand.

94年 It needs us to live // we drink 水道水 水道水 is very clear Near days we buy “水道水” to clear drink.

4) 留守番電話

93年 Today it is very useful /// for example, we drink // あっ// we go to park / someone called me

94年 It is very convenient things for us because if we *not* stay *in* home we can know message from from someone

5) 入れ歯

93年 The old man /// “gatagata” (入れ歯を表わす動作) It is can put off put it. It is washed It is clean.

94年 It is not *nature* うんと// When we old, we can eat by my teeth

6) コンセント

93年 It is small. It is two. あっ We need to plug *in*. (コンセントを差し込む動作)

94年 It is instrument to to use electronic. // If if /うんと I use コンセント we can use electronic

7) 通信販売

93年 In case we can't go shopping, we need 通信販売. It is paper. We select the subject. We need very useful. But /// someone

94年 If I am too busy, I can use 通信販売. 通信販売 うんと 通信販売 is, I can, I look

8) 水族館

93年 We, we when I was young, I often go to "suizokkan." There are many fish / in "水族館". It is *place* "イルカ" show, show whale show. It's really ____

94年 It is amusement park. In there we can look うんと many many fish and strange strange animals.

9) 車イス

93年 (咳ばらい) In the world //// people who can't walk alone, 車イス use used. It is /// (動作)

94年 It is うんと to disabled. It is *instrument* to disabled man. うんと It, it moved うんと by the man and / another people.

10) フライ返し

93年 It we use (目を閉じる) we use //// It is used // to make, cook tempura. 天ぷらじゃない Turn //// (膝を打つ)

94年 It is, うんと it is it is cook instrument for cook. For example, we when we use egg and オムレツ

被験者 # 7

1) かかし

93年 It stand on the field /// pro……protect, uh /// (考え込む)

94年 Like a doll standing on the field, *protect* うんと crops from birds.

2) 盲腸

93年 うんと appendicitis (動作) *正解

94年 appendicitis *正解

3) 水道水

93年 We can drink from /// (首かしげる動作)

94年 うんと water うんと in the kitchen.

4) 留守番電話

93年 If telephone *come* to home, if nobody here, we record message / in the telephone.

94年 うんと telephone with taperecorder

5) 入れ歯

93年 a person who / has who has no / teeth It is imitated teeth, imitation of teeth.

94年 Imitation tooth うんと Old people use it.

6) コンセント

93年 electric switch あれ, うんと cooked ____ we use *electric machine*

94年 (せき払い) electronic // switch /// on the consent put into コンセント

7) 通信販売

93年 It is system of shopping. We write down on the paper we want to buy we sent to company

94年 うんと People can / go buy something on the telephone and あっちがう mail.

8) 水族館

93年 It is museum of fish あっ fishes. Many kinds of fish / in the museum.

94年 Many kinds of fish or animal in the sea / museum.

9) 車イス

93年 (せき払い) It is a chair. It have two wheel うんと which by with handicapped.

94年 Wheelchair

10) フライ返し

93年 We use it for cooking // hot cake, or ハンバーグ upside down

94年 It is used for cooking / to /(フライ返しを使う動作) upsidedown something.

被験者 # 8

1) かかし

93年 It is あっ It has long legs we have one leg. It is in rice field.

94年 It has one foot and and sometimes it has a hat and in the rice field

2) 盲腸

93年 It is a / kind of stomachache.

94年 If if you had it, you need in the hospital in the hospital

3) 水道水

93年 It comes from わかんない

94年 ええっ water comes from ///わかりません

4) 留守番電話

93年 It records your /// voice in telephone. // You can record your message

94年 If ///// it recorded your message // if *the people* wasn't there

5) 入れ歯

93年 If you if you lost your teeth, you can, you use it if you use it. You can use it You can eat anything.

94年 Usually old people use it who nothing, who had many who had *no many* teeth

6) コンセント

93年 It is very useful. And you can / use /// electric *food*.

94年 If you used television, you /////わかりません

7) 通信販売

93年 When you use catalogue, you want to /// you can't it if you telephone or

94年 You can get // thing many things, call ええっ (下を見つめる)

8) 水族館

93年 There are many fish dolphin. /////

94年 There, there are many kind of fish and sometimes dolphin. You can see them / there.

9) 車イス

93年 When you have accident, / we can't walk, it is useful // to help your walk.

94年 It is used by the people who we are broken legs / and can't walk.

10) フライ返し

93年 When you cook, you, // use it.

94年 If you made made a, cook, made // pancakes, you can use it.

被験者 # 9

1) かかし

93年 It is one, one-leg, one-leg standing is under legs. Another leg is separate from ____.

94年 Something うん like a person うん which is without (不明). It offend crows.

2) 盲腸

93年 “盲腸”? It's, don't move body. It can be separate from

94年 If you have it in your body, you should take it off by operation in hospital.

3) 水道水

93年 うんと, うんと We, we can drink. It's, it is more easy. It is more (不明).

94年 It is for, it is water. It is easily taken from our houses.

4) 留守番電話

93年 うんと if a person isn't in home, うんと telephone can speak for the person to

94年 If you are out of house // you call give in your telephone by recording.

5) 入れ歯

93年 うんと, うんと spare spare tooth too which are separate from a person's muscle

94年 It is // t is tooth うん

6) コンセント

93年 うんと, うんと Electric (不明) from radio, computer. It has a plug.

94年 It access electric equipment

7) 通信販売

93年 People can buy thing by sending うんと catalog

94年 You, uh, you can (咳ばらい) buy / something you want / by mail // You can

easily get it.

8) 水族館

93年 fish, fish and sea, sea animals are (不明) museum *There is very difficult* It is very interesting place.

94年 // Marine park // There many fishes like fish // like a sea

9) 車イス

93年 handicapped person used, use うんと, うんと あっ We, it is, it has two wheels

94年 It, it, it help a person who had, *who* handicapped with his legs

10) フライ返し

93年 うんと by people use, people make omlet by fry pan people can turn it

94年 It helps //foods turn over in フライパン

被験者 # 10

1) かかし

93年 It stands in a // Japanese 田んぼ It shapes // like mankind, and not walk. It's a // lonely lonely かかし (うつむく)

94年 scarecrow *正解

2) 盲腸

93年 /// appendicitis *正解

94年 appendicitis *正解

3) 水道水

93年 (うつむく)

94年 Uh, we call it, uh, water, especially, its from, uh /// I can't explain

4) 留守番電話

93年 It is // option of telephone It is used / by // someone / went went out

94年 answering machine *正解

5) 入れ歯

93年 //// It is a // article / and putting in the (時間切れ)

94年 Uh, it, it's a imitation teeth

6) コンセント

93年 コンセント is (沈黙)

94年 We call it “コンセント” in Japanese. Maybe / it's in, its, uh // (顔を両手で覆う)

7) 通信販売

93年 //////////////

94年 /// (下を見て考える) We call it to, uh, co, company and they send a, they a stuff to us.

8) 水族館

93年 aquarium *正解

94年 aquarium *正解

9) 車イス

93年 It is // used by //// (手を動かす)

94年 wheelchair *正解

10) フライ返し

93年 It is used by // cooking. For example ///目玉焼/ hot cake and

94年 フッ We use it, for example, to make hot cake, sunnysideup egg, and etc.
Uh, partner with フライパン

A Longitudinal Study of Japanese University Students' Acquisition of Describing Lexical Items in English — Interim Report —

This paper presents an interim report of an experimental study on in what ways and to what extent students studying at the Faculty of Humanities at Hokkai Gakuen University will develop their oral production skills in English in four years. The experimenter presented orally ten lexical items in the subjects' L1 (Japanese). The ten students were asked to give an English equivalent if they knew it. But if not, they should describe or define it within twenty seconds. Their narrations were videotape-recorded in the first and the second year at the same time of the year for the sake of precise linguistic and extralinguistic analyses. Then, the two sets of data were both qualitatively and quantitatively analyzed to record morphological, syntactic and pragmatic development over a year. The qualitative results show certain development in the area of linguistic creativity; some students became positive enough to try to describe items by creating a new word or phrases of their own. Furthermore, many of the subjects in the second-year experiment looked more confident, with clearer pronunciation and rhythmical tempo of speech. The quantitative results show that their utterances became longer with grammatical errors reduced. Whereas in first year, the subjects hesitated in silence, in second year, they used hesitation sounds and interjections, both in Japanese. The subjects in general appear to be less dependent than in first year upon such extralinguistic communicative means as gestures but instead to be more linguistically creative and less hesitant to express whatever they had in mind.